

惠谷隆戒先生を悼む

水谷幸正

惠谷隆戒先生、先生はあまりにも早く、私どもの前を駆け足で素通りして、お浄土へ旅立たれた思いにかられてなりません。なるほど最近は少し弱られたかな、という感じはいくらかはありましたものの先生の誕生日である三月

夜おそくまで無理をなさっておられたとことです。死期を自覚して死期を早めた、としか言いようがありません。このようにして、素通りのようなかたちで逝ってしまったのであります。

二十三日に、ホテルフジタで親しい者数十人が相集って喜寿のお祝いをいたしましたときには、数年は大丈夫ご活躍なさるであろう、というのが出席者一同の実感でありました。五月の中旬ごろであったかと思いますが、新版の「新浄土宗辞典改訂版」を、「逆修供養 惠谷」の挿紙をそえて、学内の関係者に贈呈しまわっておられました。このとき、すでに今日あるのを気付いておられたのかもしれませんが、あと三百枚ほどの原稿をどうしても仕上げねばならないと、

先生のご生涯は、まさしく佛教大学に身も心も捧げた一生でありました。佛専、佛大に学んだ宗門人で先生の学恩を受けていないものはありません。学生への面倒みは懇切でありました。できの悪い学生ほど、とくに可愛いがつもらいました。まさに菩薩道の実践者であったといってもよいでしょう。その人となりを一言でいえば、月並の言葉ではありますが、実に温厚篤実なかたであった、といえます。温厚篤実であり、しかも細心剛腹なかたでしたので、多く

の学生から親のようにしたわれていたのであります。

ちょうど三十年前、佛専から佛大への昇格について、いまは亡き藤原弘道先生や三枝樹正道先生とともにひと役をはたされたのであります。昇格後、両先生はそれぞれ東山、家政の校長として転出なさったため、恵谷先生こそ佛教大学運営の中心的存在でありました。雨の日も風も日も、黙々と、朝早くから夕方遅くまで、大学の最も苦しい時代に、率先して精励なさっていた後姿に私どもはいかに教えられたことでございましょう。今日の佛教大学の基礎は、先生によって築かれたのであります。昭和二十八年よりの通信教育部長時代の活躍もさることながら、昭和三十六年、推されて学長にご就任なさってから、学部、学科を増設して一般大学のありかたへの途をきりひらいてゆかれたご功績は、佛教大学中興の祖と名づけても言い過ぎではありません。ともかく先生のご逝去は、学問の上からいつてもたんに佛教大学の損失であるばかりでなく、浄土宗門にとつても大きな痛手を与えるものであります。やはり、どうしても、もう数年間は活躍していただきとうございました。

先生は若いときから寸暇を惜しんで読書三昧に耽けられたと聞いております。その積み重ねが、先生をしてすぐれた宗学者たらしめたのでありましょうが、とくに敬服おくあたわざることは、晩年の学問研究への情熱であります。秀才のほまれ高かったひとり息子、俊之君に先き立たれた打撃がいかに痛烈であつたかは、親の情として当然であります。その深い悲しみを乗り越えて、宗学のために、そして佛大のために、ありつたけのエネルギーを燃焼しつづけられたのであります。柔和な先生の面ざしの中に秘められたいわば壮烈な生きざまを、そこにかいま見て凜然として襟を直さずにはおれません。研究と教育に一途に打ち込んでいった脱俗の聖者こそ晩年の先生の姿でありました。

ご逝去の二、三日前、苦しい息の中から、付き添う遺弟に淳々と遺言を説かれたのであります。そして、善導大師のお迎えがあつたことを心から喜びつつお浄土へ念仏往生なさいました。いまはただ先生のご冥福を祈り、金蓮台上より私どもを導かれんことを願うとともに、先生が理想とされていた大学を必ずや近い日に実現することをご霊前に誓いつつ意は尽くしませんが悼む詞といたします。